〈概要〉　院政期私家集と歌人の研究

小林　賢太

本論文は院政期の私家集と歌人について論じたものである。主な考察対象としたのは十二世紀後半、平安時代末期から鎌倉時代初期に当たり、後白河院政期とほぼ重なる。この時代、多くの私家集が編まれた。身分、性別、年齢などにかかわらず、歌人たちは自らの歌稿を編み、家集として後世に残そうとした。もしくは当人の没後、その遺稿を近親者などが編纂した。私家集とは一体何なのか。何のために、どのような意識のもと、いかなる方法を用いて作られたのか。こうした私家集編纂の原動力、意識、方法の一端を明らかにすることが、本論文の目的である。

本論文が研究対象とした家集は、すべて自撰家集である。誤写や欠脱など多少の問題を内包するものもあるが、自撰家集は数百年前の歌人が有していた編纂意識や構想が直接的に反映され、そのまま残っている可能性が高い。自撰家集をひとつの文学作品として捉え、そこに潜む意識や方法について考究していく。時に伝記・歌壇研究の視点からも考察するが、全体を貫く基本的な問題意識は、私家集編纂の原動力、意識、方法を解き明かしたいという点にある。こうした疑問をもとに、いくつかの家集を個別に検討し、それらを巨視的・体系的に論じることで、院政期の私家集を取り巻く文学的事象の実態を明らかにし、歌人たちの文芸意識を解明していきたい。

本論文は序章と終章を除くと、九つの個別的論考から構成される。第一章から第五章は、歌林苑に出入りしていた歌人の集を考察対象とし、他家集・他資料とつき合わせながら、編纂過程における自己認識や編纂意識を考察する。第六章と第七章は、『建礼門院右京大夫集』（以下『右京大夫集』と称す）に関わる論考である。『右京大夫集』の最終的な成立は十三世紀初頭であり、本論文が考察対象とする時代よりもやや下る。しかし『右京大夫集』はいくつかの段階を経て成立しており、十二世紀後半において既にある程度は執筆されていたと考えられるし、作品が描く内容の多くは十二世紀後半のことである。形態・内容ともに、家集としてはやや特異なこの家集を検討することは、私家集の多様性を考え、その諸相を明らかにするために重要と考える。第八章と第九章は歌壇や歌人に比重を置いた研究である。隠遁者や女房歌人がどのような場で詠歌し、文芸活動を行っていたかを検証し、歌壇の俯瞰を試みたい。各章の概要は以下の通りである。

第一章　『林下集』題号考――自撰家集の名称と編纂意識――

『林下集』は藤原実定の家集である。『林下集』に先行する私家集の多くは、歌人名を冠しただけの単純な書名がほとんどで、『林下集』のように凝った題号の家集はそれほど多くない。「林下」という語は、「官を罷め、俗世から離れた隠者の暮らし」の意で、一種

の卑称であり、『白氏文集』所収「老來生計」が典拠と推定される。家集成立時において既に公卿であった実定の集に、こうした謙退表現を命名できたのは、他ならぬ実定自身であり、その背景には過去の長期にわたる沈淪が影響していると考えた。一方で閑居は文学的に見ると、ある種の憧憬の対象ともなり得る。事実、長期の不遇時代は実定が歌林苑に接近し、和歌や諸芸に耽溺した期間でもあった。「林下」という語には、「官を退いた閑居」という意に、「風雅に身を沈めた閑雅な隠棲」の意を重ね、身の不遇を文学的に昇華させようとした意図が見出せる。『林下集』が描く淪落から政界復帰までの過程には、『源氏物語』における光源氏の須磨流離から官界復帰までと共通する表現があり、そこには過去の沈淪経験を文学的に形象化しようとした形跡が見出せる。これと同じく、「林下」という題号も、身の沈淪を文学的に昇華させるための方法であったと考えられる。さらに、『林下集』では巻軸に左大将就任を祝う歌群が置かれているが、実定は近衛大将の官に思い入れがあったようであり、「林下」には「羽林」（近衛府の異称）の意が掛けられている可能性もある。

第二章　『林下集』『実家集』の編纂意識――贈答歌改作をめぐって（一）――

私家集には歌合などの晴の歌だけでなく、多くの贈答歌が収められている。中には同じ贈答歌が、歌を贈った者と返した者の両方の家集に収められていることもある。そして両家集を比較すると、歌に異同があるケースが存する。これは記憶違いや書写過程における誤写の可能性も捨てきれないのだが、贈答した二人のうちのどちらかが、家集編纂時に改作した可能性もある。第二章から第四章にかけてはこの贈答歌改作の問題について考察した。『林下集』と『実家集』は、同母の兄弟である実定と実家の家集である。両集収載の贈答歌を詳細に検討した結果、『林下集』では贈答歌の改作が相当に行われた可能性が高いことが判明した。そして改作の際は、修辞を凝らし、和歌表現の完成度を高め、詞書と和歌を対応させ、時には大胆な配列の入れ替えも行ったようである。もとは鸚鵡返しのように繰り返されていた贈答の語句を、別表現に変えた例も確認できた。また留意しておきたいのは、自詠だけでなく他人詠をも改作しているという点である。現代の感覚では他人の歌に手を加えるということは考えにくいが、平安末期においては、他人詠を改作するという行為も、ある程度許容されていたと言える。

第三章　『殷富門院大輔集』の編纂意識――贈答歌改作をめぐって（二）――

後白河院皇女・亮子内親王に仕えた女房歌人・殷富門院大輔（以下、大輔と称す）の家集を考察対象とした。『殷富門院大輔集』（以下、『大輔集』と称す）所収の贈答歌を検討した結果、いくつかの贈答歌は贈答当時の形に手を加えたと思われる形跡があった。だが多くは大輔詠に大きな異同があり、第二章で取り上げた『林下集』とは異なり、大輔自身

が自詠を改作したものである可能性が高い。改作の目的としては、同一の語でひとまとまりの贈答歌に統一感をもたせたり、古歌や先行歌、先行作品などをもとにして歌の整えたりするためと考えられる。一方、比較対象とした家集のひとつ『頼政集』でも、頼政が自詠を改作したと思われる例が確認できた。その目的は、ある語を前後の歌の言葉と共通する語、または類似した語に差し替え、前後の歌との連想を繋げていくためと考えられる。『頼政集』においては、ある言葉がある言葉に繋がっていき、言葉の連想により和歌が配列されている箇所がある。この言葉の連想による配列をより滑らかにするため、頼政は自詠に手を加えたのであろう。なお、このように緩やかな言葉の連想で和歌が配列されていくケースは、『大輔集』にも見られた。類似する語で歌群をまとめたり、言葉の連想によって和歌を配列したりする方法は、当時の家集編纂におけるひとつの手法であったと考えられる。

第四章　『隆信集』の編纂意識――贈答歌改作をめぐって（三）――

『隆信集』には寿永本と元久本という二種の本がある。元久本『隆信集』は多少本文や隆信自身の記憶に怪しいところがあるものの、寿永本や他家集と比較すると贈答歌に異同のあるケースが見られた。そのうち、隆信詠に異同があるものと他人詠に異同があるものは半々であった。隆信詠に異同があったもののうち、寿永本と元久本とで語句が異なる例（隆信集Ⅱ・三二〇～三二一）は明らかに隆信の改作と考えられ、おそらくは寿永本と元久本それぞれで、前後の歌と語を揃え、統一感を出すための改作と考えられる。一方、贈答相手の歌に異同があるもののうち、相手が右京大夫であった二例（隆信集Ⅱ・六七六、六八〇）は、右京大夫自身の改作である可能性が高いと判断した。しかし、相手が恋仲の女性（隆信集Ⅱ・七六四）と兵衛（隆信集Ⅱ・六四四）であった二例は、寿永本と元久本とで歌の表現が異なっており、隆信がどちらかに手を加えたことになる。隆信も実定同様、他人詠を改作していることになるが、その相手がいずれも女性であるという点は示唆的である。おそらく他人の歌を改作する際は、相手との身分差や関係性が影響していたのではないだろうか。

第五章　『小侍従集』の構想――雑部を中心として――

『小侍従集』は、二代の后・藤原多子に仕えた女房歌人・小侍従の家集である。『小侍従集』の四季・恋部には題詠歌のみがあり、贈答歌はすべて雑部に収められる。この雑部を読み解いていくと、小侍従の実生活や人生史が浮かび上がってくるように見える。そして『小侍従集』雑部から読み取れる小侍従像は、「恋多き女房歌人」としての姿である。一方で他資料からは、小侍従が一時期宮中を退いて美濃国に滞在していたことや、夫や子どもがいたことなどが確認できるが、それらに関する記述は家集から排除されている。家

集に描かれるのはあくまでも「恋多き女房像」なのである。彼女がこうした自己像を家集で描こうとした理由として、母方の系譜への顕彰であると考えた。小侍従の祖母、母はともに女房歌人であり、特に母・小大進は和泉式部にも例えられた才媛女房である。祖母の代から受け継がれる〈女房歌人の家〉への意識、そして才媛女房であった母への顕彰から、小侍従は自らも「色好みの女房」として振る舞い、家集にそう定位したと考えられる。また出家をめぐる歌群には、出家前の歌をも出家後の歌のように見せかける虚構が施されていたことも判明した。

第六章　『建礼門院右京大夫集』の『讃岐典侍日記』受容

――序跋・巻末追記の比較を通して――

建礼門院右京大夫（以下、右京大夫と称す）は、平清盛女で高倉天皇中宮となった建礼門院徳子に仕えた女房歌人である。彼女の家集『右京大夫集』は、部類家集が多数であった時代において、編年形式をとっている。だが時間の流れと歌順は恣意的に操作され、完全な編年体でもない。また序跋を有しているが、これも当時の家集としては珍しい。『右京大夫集』は構造的にも内容的にも、私家集というよりは日記文学作品と近似性が高い。特に『讃岐典侍日記』とは共通点が多く、序と跋、もしくは序と巻末追記の表現や内容が対応していたり、最末尾に書き添えのような形で巻末追記を置く構造が共通したりしている。両作品ともに喪失した過去を追慕・懐旧する性格があり、『右京大夫集』は『讃岐典侍日記』から影響を受けている可能性があることを指摘した。また『右京大夫集』が構造・内容ともに日記文学作品に近いにもかかわらず、家集という形態をとったのは、右京大夫の歌人としての自意識、また勅撰集撰集のための資料であったことと関係があると推定した。

第七章　『建礼門院右京大夫集』における〈薄様〉

――能書家の娘としての感性――

『右京大夫集』には「薄様」という語が頻出する。そのほとんどは和歌を書きつけた料紙としての「薄様」であり、その色彩が詳細に記録されている。だが他の私家集では、歌の書かれた料紙の色まで記載する例は少ない。この傾向は勅撰集や私撰集でも同様である。当作品における「薄様」の使用例を確認していくと、上巻では色とりどりの鮮やかな薄様が描写され、王朝物語さながらの優美な贈答を演出していた。一方、下巻における薄様は、「白薄様」が二例のみであり、そのうち一例は五節に歌われる郢曲の名で、かつての平和な時代に歌われた白薄様を思い出し、過去を懐旧する内容であった。もう一例は料紙としての白薄様であるが、文字通り色は白であるうえ、上巻での華やかな贈答歌とは異なり、弔問歌を書きつけていた。この上下巻における差異は、両巻が描く世界の差異と相関する。

『右京大夫集』上巻における色鮮やかな薄様は、平家健在時代の平和で典雅な宮中を表すものであり、下巻で色彩豊かな薄様が排除されているのは、平穏で風雅な世界の喪失を表す意図があったと考えられる。こうした表現の素材として薄様が用いられたのには、右京大夫が入木道の家で生まれ育ったが故に紙への関心が高く、普段から料紙に配慮していたことが関係しているだろう。またあわせて、平安期の贈答歌における色紙の用いられ方についても確認した。

第八章　覚綱とその家集――「宮ばら」の意味するもの――

平安後期の歌人覚綱は、右馬助入道藤原範綱の子で、和歌六人党の一人である藤原範永の血を引く。『尊卑分脈』によると延暦寺僧とあり、いくつかの歌合にも出詠しているが、勅撰集には一首もとられていないため、これまであまり着目されてこなかった。そこで『覚綱集』の表現と覚綱の歌歴の検討を通して、主流から外れた地下・隠遁者層の和歌活動を考え、院政期の歌壇を俯瞰することを試みた。端緒として、『覚綱集』に二例使用される「宮ばら」という語に着目した。「宮ばら」には「皇族を母に持つ者」と「皇族・宮の方々」の二つの意味があるが、注釈などでは機械的に「皇族を母に持つ者」の意が採用されている。しかし『覚綱集』や同時代の家集を読み解くと、「皇族・宮家」の意味で用いられる例が多々あり、今後は「宮ばら」の解釈に慎重になるべきであることを提唱した。また「宮ばら」は歌林苑に出入りした歌人の集に使用例が多く、「ある宮ばらの女房」などのように朧化表現や女性を指す語とともに用いられる例が散見された。これは王朝物語的な恋の雰囲気を醸成させる際の、ひとつの表現パターンと考えられる。こうしたイメージを歌林苑に出入りする歌人たちは共有しており、覚綱のような群小歌人も同様であったことは示唆的である。覚綱の歌歴を確認すると、詠歌の場は歌林苑、賀茂社、六条家、摂関家などが複雑に絡み合った中に浮上してくるが、主流から外れた小歌人らは、こうした広く浅いネットワークを渡り歩き、詠歌の場を求めていたのであろう。また奉納百首である『覚綱集』は、自身が重代の歌人であることの誇示と、近親者の死を悼む意図があったのではないかと推定した。

第九章　亮子内親王家の女房たち――殷富門院大輔の周辺――

第三章で取り上げた『大輔集』の作者である大輔の周辺に目を向け、彼女の主家である殷富門院亮子内親王家の女房たちについて論じた。従来の大輔研究は歌林苑周辺に着目されがちで、出仕先における動静はあまり注目されてこなかった。だが大輔は四十年以上も亮子内親王家に仕えており、主家での経験は家集編纂を含めた大輔の文学的活動に影響を与えていたはずである。また文化的影響力の小さくない亮子周辺の文芸的実相を明らかにすることは、当時の歌壇や文化的諸相を把握するためにも有効であろう。そこで、亮子内

親王家に出仕していた女房たちの歌歴を洗い出し、大輔周辺の人的構成とその文化的背景、さらには文芸の場としての女院御所という場について考察した。具体的には、詠歌の残る六人の女房歌人の存在を明らかにし、これまで混同されがちであった中納言と新中納言の別を改めて明確に示した。また亮子内親王家は大輔以外にも、外部に人脈を持つ女房歌人や諸芸に秀でた女房らを擁し、高い文化水準を維持していたことが判明した。そして女房たちが外部と接触する際には、大輔が媒介となっていた可能性が高い。また女房たちは雅事を記録して外部へ伝える役割も果たしており、后妃・女院など貴顕女性の御所が詠歌記録の収集、蓄積、伝播といった活動を担っていたことも再確認できた。

以上九つの個別的論考を、終章では総合的に論じ、本論文の総括と今後の展望を述べた。

本論文では自撰家集の編纂過程に存した意識や方法のいくつかを指摘したが、それらの根底にあるのは「ありたい自己像」「あるべき自己像」を家集に書き残したいという歌人たちの所願であった。どの歌を家集に入れるか取捨選択し、どのような詞書で表現するか拘泥することによって、家集から浮かび上がる歌人像は異なってくる。数百年前に生きた人間の自己認識や自意識が明らかになるという点で、私家集研究には大きな意義がある。

私家集研究の根幹は、まずは個々の家集を虚心に精読し、新見を積み重ねていくことであろう。同時に、それらを巨視的に総括し、全体を俯瞰する視点も忘れてはなるまい。積み重ねられた論考を総合的に考えることで、私家集という文学作品群を立体的に、そしてダイナミックに捉えることができ、大きな事象の解明に繋げていけるはずである。私家集の新たな一面を発見するべく、今後も多角的に研究を進めていきたい。